

新編水滸畫傳

初編

六

875
6



875
6

神書佛書鬚書國學
繪本年分新古賣買
手遊いふく法度日間
河内文了江下り上

後後町三休指西入

河内屋孫玄衛

新編國字水滸畫傳靈根號初編後帙

開詞

土三

第五回

禪林辭去入禪林。知己相逢義斷金。且把威
風驚賊膽。謾將妙理悅禪心。綽名久喚花和
尚。道號親名魯智深。俗願了時終證果。眼前
爭柰沒知音。

第六回

萍踪浪跡入東京。行盡山林數十程。古刹今
番經劫火。中原從此動刀兵。相國寺中重抵

塔種蔬園內且經營。自古白雲無去住。幾多變化任縱橫。

第七回

在世爲人保七旬。何勞日夜弄精神。世事到頭終有盡。浮花過眼總非真。貧窮富貴天之命。事業功名隙裡塵。得便宜處休歡喜。遠在兒孫迤在身。

第八回

頭上青天只恁欺。害人性命霸人妻。須知奸惡千般計。要使英雄一命危。忠義縈心山裏賦。貪嗔轉念是慈悲。林冲合是災星退。却笑高俅枉作爲。

第九回

天鵬鳴

千古高風聚義亭。英雄豪傑盡堪驚。智深不救林冲死。柴進焉能擅大名。人猛烈馬狴犴。相逢較藝論專精。展開縛虎屠龍手。來戰移山跨海人。

第十回

天理昭昭不可誣。莫將奸惡作良圖。若非風雪沾村酒。定被焚燒化朽枯。自謂其中施計

毒。誰知暗裡有神扶。最憐萬死逃生地。真是
瑰奇偉丈夫。

皆

文化乙丑初冬上旬。曲亭主人錄於飯岱著作
堂。



附言

前帙五冊倉卒の間。稿を脱し。うをり。あはふ。び考ふ。さんと
あり。むつ。書を肆。ホ發。兌の時。帝か。う。と。只管。獮。梓を。し。が。し。
あ。う。校。漏。さ。せ。既。世。刊。布。せ。り。より。て。錯。誤。少。う。ん。就。中。宋。此
洪。邁。容。齋。統。考。の。如。こ。悞。り。宋。洪。邁。俗。考。と。日本。書。紀。を
日本。書。記。と。さ。る。の。と。ご。ひ。枚。舉。小。違。あ。ら。む。と。わ。ら。ぬ。婦。幼。の。為。ふ。と。う。り
を。述。ぶ。も。あ。ら。ね。ど。織。者。の。一。嚀。を。い。う。せ。ん。只。こ。の。編。の。と。な。ら。ば。と。凡
印。本。の。作。者。の。自。筆。あ。ら。む。と。う。校。正。等。用。あ。ら。む。行。誤。を。さ。さ。る
る。を。得。む。と。う。魯。を。魚。と。あ。ら。む。の。い。ち。へ。より。と。ま。あ。り。漫。戲。の
稗。説。ふ。く。誤。字。假。名。違。ホ。を。正。し。足。ら。ね。ど。甚。ま。い。志。の。が。甚。む。更。ふ
数。行。を。追。書。し。他。者。の。拙。を。補。ふ。の。と。且。前。帙。序。卷。論。を。此。の

一部水滸百
幻其中施

羅拔華

奇

逼天工

堂堂

神州不

乏文雄

出藍譯

者

那英笠翁

青洋馬昇贊國

新編水滸畫傳卷之六

序四



をあらはに彼一桶の酒を奪くハ喫すばかりしよ。そは故ふとそく。林本
 酒してとつまあど独言舊病ふらび發り。世の清水流酒がり使骨中
 清水流酒を流すをも喫むや。却り。此を徘徊。不意彼物の御首せ。家
 のまへに到りてく。是の足鐵匠が店ありき。その間壁の客店にて。門
 父子客店一泥は父子がんまんの氏。その西字を寫著する招牌を出おはる。
 魚智深うちん深ちんすありち鐵匠ぢが舗せも立ちり。二三人の待詔てまうりも對ひこの裡うち
 好鋼ありやと之ハ鐵を打りの鏈を任。とどめて魚智深をんま
 腮の邊ハ新あ剃はきる鬚短くをえ。戯つ地ぢ。とどめて。き形
 容さまされハ待詔てまうりも怪あやし怕おそき。師いふまづ裏うらみ入り。歌うたの何の要ま
 鋼こを求めらふぞといハ智深ちん。これ一條の禪杖ぜんじやうと一口の戒刀かいとう
の用具なり。僧史畧ハ曰蓋佛ハ一切の草木を研截鬼神を壞す。とを打まぐかりん。

以もて好鐵こうてつありやと之ハ待詔てまうりも幸さい上等の鋼こを六りち合あてん
 なる。その禪杖ぜんじやうと戒刀かいとうの長短輕重ハ。いふは。は。ふ。ま。り。や。と。言。ふ。
 魚智深うちん深ちん。戒刀かいとうハ尋常じんじやうの寸法すんぽうは。做あべ。但た禪杖ぜんじやうと一條の重おも約百
 斤しんあり。み。て。ま。ん。あ。ん。と。命いのちされハ待詔てまうりも笑わらひ。そ。は。あ。り。重おも
 一。動うごく。事ことか。あ。べ。う。す。む。し。閻王えんじやうの青龍せいりゆう刀とうも八十二斤しんあり
 一。け。ま。り。傳つたへ。い。い。ひ。も。果はつ。ち。魚智深うちん深ちん。大おほ魚うい燥さう。そ。は。
 以もて國羽こくうも劣せは。べき。信しん。是こゝろ一箇いっかんの人ひとあり。汝なんぢ無用の香かぐを動うごす。事ことを。ん
 一。之これハ待詔てまうりも。我われ們ら。ま。ま。も。重おも四五十斤しん打うち。進ま進まじ
 これ。も。も。あ。十。分じふぶんの重おもあり。ん。い。ふ。を。魚智深うちん深ちん頭かぶを。花はな右みぎより。ち。り。
 以もて百斤ひゃくしんも。せ。は。く。と。い。ふ。も。汝なんぢ。い。ふ。不ふま。り。て。閻王えんじやうの偃月えんげつ刀とう。八十二
 斤しん打うち。一。之これハ待詔てまうりも。禪杖ぜんじやうの。あ。り。肥こま。使つかひ。も。あ。便べんり。



魯智深鐵匠人
 舖子裏にて禪杖
 戒刀を打んとすを要す

竹編人竹...



新編水滸畫傳卷之六

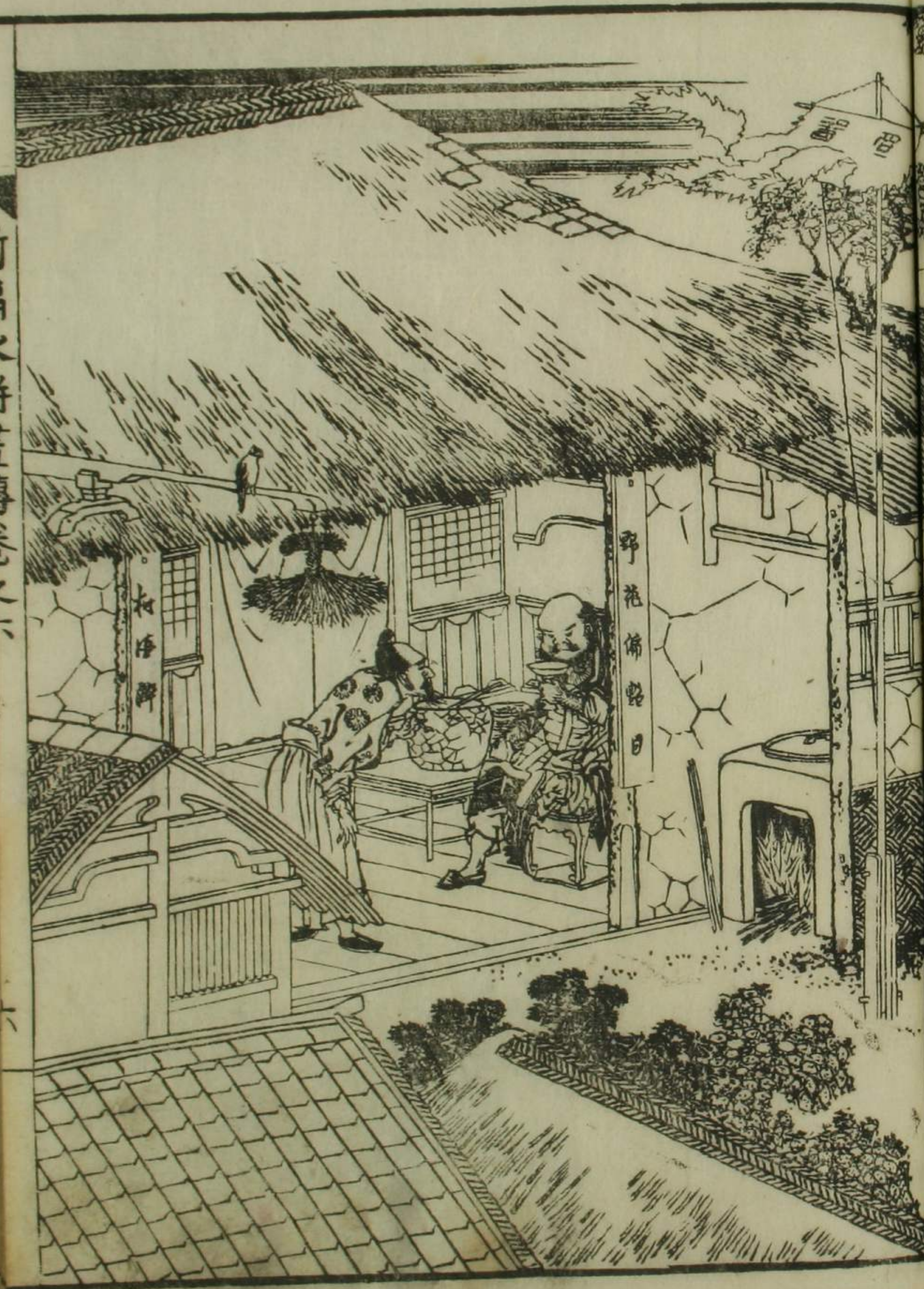
三斗入
 百半路
 五正の
 七五の
 五五の
 五五の

今その中分をとりて。六十二斤の水磨禪杖を打く進下せり入りし動
 一得ものせしむ。それをむかひしむ。魯智深ややくうけし。志
 を六十二斤の打之杖。兩件の家生價銀いさうを。同討價あり。五
 兩の銀子をより。魯智深は。これへ價銀の少を論せむ。
 只顧よき鋼を用く打り。意を稱ひ。別賞を得せし。
 いひつ。懐中より銀子を取きて。これを進下し。公飲し。さうふ。
 待詔。對し。いさう。これ今酒を買。汝と喫べ。さうふ。待詔。
 答。さうふ。かく生活よい。さうふ。相陪し。が。こ。固
 辭。魯智深の強くも勸む。鐵匠店を立出。いさう。二十
 も到。只。魯智深の酒望子を挑。屋の簷上あり。智深
 又。魯智深を放。槍と裏。さうふ。坐。卓子。高。

酒を將。あれ。主人出迎。師父。五臺山の僧人と。さうふ。
 せ。この房屋も本錢も。借受。生活。長老
 豫。法度を出。寺内の僧人。酒を賣。喫。さうふ。
 本錢も追了。房屋も。出。師父。賣。さうふ。
 魯智深。それ。あ。此の酒を喫。これ
 人。對。酒を買。再。求。一切。引。魯智深。走。出。彼主人。さうふ。頑。漢。子。引。魯智深。飽。喫。後。説。話。つ。ま。ま。車。歩。又。一軒の酒旗。望。直。家。入。酒を喫。この店の主人。長老の法度。あ。魯智深。せん。あ。立。出。四。五軒の酒肆。到。

うし。さあ悉く賣り去る。その時魯智深もその中へ謀を謀り申箱蓋
 頭よりききし。さあ。お花うら。咲かす。門。草堂僧尼を排出せ。家
 あまの簾子を掲げ。裡へ入。さ。や。や。窓の下に簾子。尻。ち。け
 これ。行脚の僧ある。漫行。し。し。餓。き。り。酒。を。喫。せ。し。り。や
 の主人。と。社家。と。おほ。ふ。つ。う。なる。漢。子。出。む。く。和。尚。り。五。基
 山の師父。ある。酒。の。賣。が。く。く。つ。を。魯。智。深。少。も。あ。へ。む。これ。遠。方。より
 来。ま。は。り。の。ま。は。り。彼。山。の。僧。人。も。あ。へ。む。酒。を。將。来。れ。し。し。き
 主人。け。り。魯。智。深。を。見。る。み。その。摸。様。声。音。も。至。る。常。み。る。こ
 ろ。の。五。基。山。の。僧。人。と。の。各。別。なり。ふ。少。も。疑。も。和。尚。の。さ。う。の。酒。を
 喫。ま。し。し。同。小。魯。智。深。茶。を。い。う。さ。う。り。し。し。あ。く。只。顧。師。將。来
 と。焦。燥。も。ぞ。せ。り。十。来。碗。の。酒。を。師。来。り。その。ほ。う。は。放。在。魯。智。深

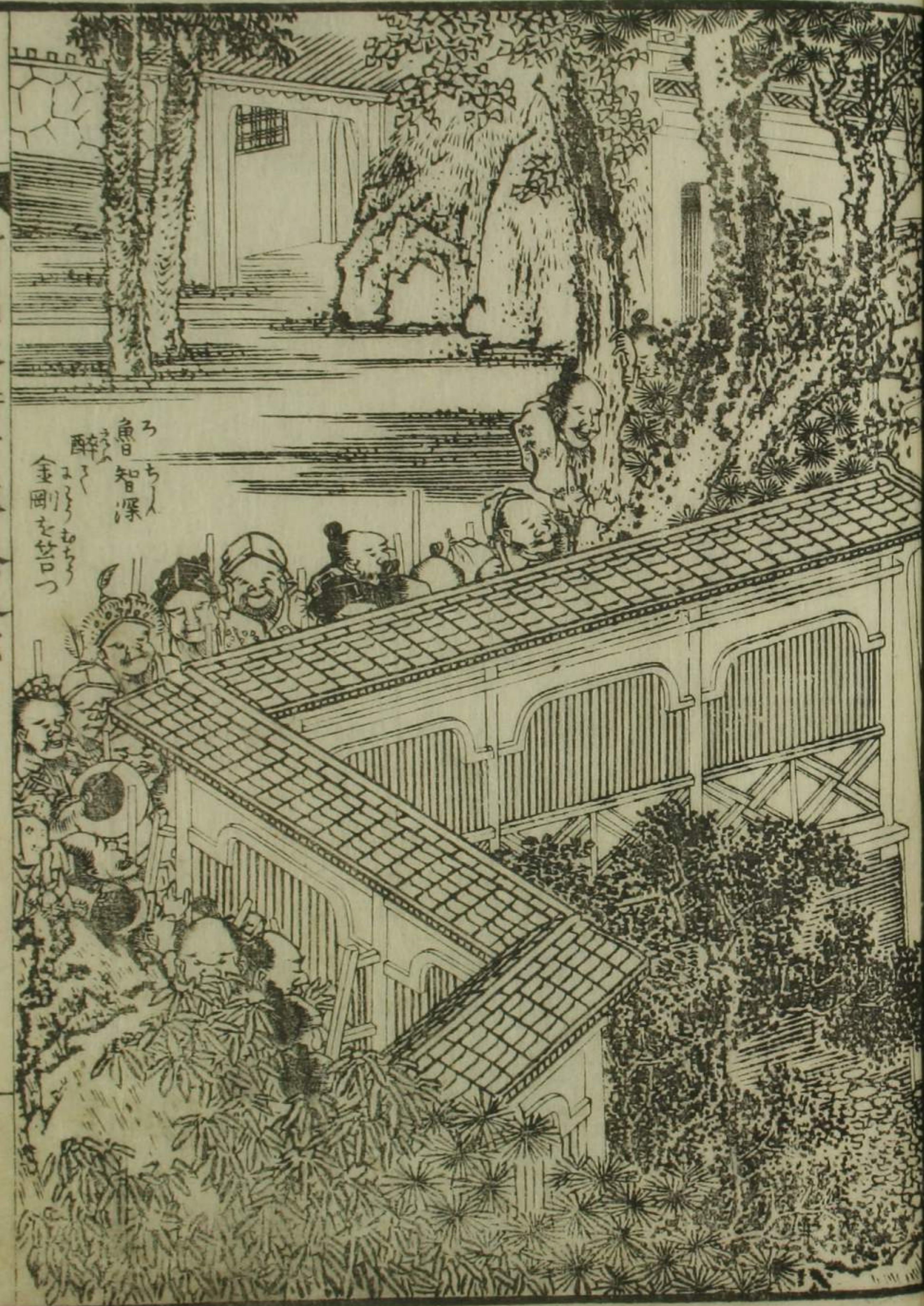
これを喫つ。主人。對。肉。あ。一。盤。喫。せ。し。し。主。人。の。早
 来。も。世。の。牛。肉。の。り。の。さ。賣。没。て。世。の。菜。蔬。あり。これ。を。進。め
 ま。ま。う。し。し。智。深。猛。み。一。陣。の。肉。香。を。聽。着。る。空地。の。不。り。ま。り
 出。只。又。ま。の。牆。の。片。陰。も。一。隻。れ。狗。肉。を。亨。つ。沙。鍋。の。裏。より。魯。智。深
 え。を。り。し。舊。の。と。ころ。ま。り。し。し。散。あり。ける。を。さ。し。は
 とい。あ。ま。の。主人。含。笑。り。は。才。出家。の人。な。れ。狗。を。ハ。喫。ま。し。し。ひ
 ひ。き。若。う。し。し。進。ら。せ。し。し。魯。智。深。點。頭。し。これ。は。錢。あり。と。い
 そ。さ。し。し。銀。子。を。進。ふ。し。し。懷。中。の。銀。を。と。り。出。し。し。魯。智。深
 を。受。收。熟。き。る。半。隻。の。狗。肉。し。世。の。蒜。泥。を。搗。き。し。將。来。魯。智。深
 大。に。喜。び。し。し。手。を。り。し。狗。肉。を。引。裂。蒜。泥。を。蘸。し。し。喫。つ。一。連
 十。餘。碗。の。酒。を。喫。し。し。滑。あり。主人。と。只。呆。し。し。ね。り。新。う。ち。ま



みきろん
 行僧と偽りて
 魯智深
 市稍盡頭
 酒を喫

魯智深ハ忽地酒を喫竭し。又一桶の酒を將奉りて
 せ。主人いひて「呆まづ。さういひ酒を留りて奉るハ魯智深ハ時哉
 後さきこれをも喫をりて。啖残せし狗腿一脚を懐み。捨て門を出
 ぶ。多的銀子ハ明日来りて喫べきぞ。いひけりて去り去り
 ちまの主人ハ目を睜け用き。只顧り呆まづ。回答せし魯智
 深ハ五臺山を望み走る。酒中半山の亭子上カ到りて歇ひ
 あり。酒ハ湧上り勢ハ就せし刃を跳起し。それ久く拽拳
 使脚をふさぎ。身體さへ倦困たり。さうハ世ノ力ためしを
 せ。亭子の柱ハ中より折れ。半相既ハ塌ぬ時。山門の門子の肝
 響をひつけり。怪し高きより見おろせし。彼魯智深ハ踏
 山より上り来りて二人の門子うち驚き山門を関し。門縫裏
 張り張ハ魯智深拳を揚り門を敲く。對を搦り下り。あけ
 あけと叫び。門子敢て開く事あり。その時魯智深ハ身を扭過
 ぐ。左邊に立は金剛をうり。声ありて喝するハ汝この鳥大漢子
 ねなかりし門を敲んとせ。却り拳を合著り。それを威す
 とも。こまかしく汝を拍まづ。いでてある酒をえまづ。といひもあ
 へ。臺基に跳り。杖刺すを名擲り。慈心を捨て。右に板撒
 折本頭を閃け。金剛の眼を下と打ハ泥和顔色まづ脱す。
 門子ハこの光景を張看り。大に慌す。長老ハ報知人して連化在
 了。いささか魯智深を又刃を調轉し。右邊なる金剛を喝
 著。汝大なる口をひき。さうを笑ふハ何事ぞか。きめえんを

魯智深ハ忽地酒を喫竭し。又一桶の酒を將奉りて
 せ。主人いひて「呆まづ。さういひ酒を留りて奉るハ魯智深ハ時哉
 後さきこれをも喫をりて。啖残せし狗腿一脚を懐み。捨て門を出
 ぶ。多的銀子ハ明日来りて喫べきぞ。いひけりて去り去り
 ちまの主人ハ目を睜け用き。只顧り呆まづ。回答せし魯智
 深ハ五臺山を望み走る。酒中半山の亭子上カ到りて歇ひ
 あり。酒ハ湧上り勢ハ就せし刃を跳起し。それ久く拽拳
 使脚をふさぎ。身體さへ倦困たり。さうハ世ノ力ためしを
 せ。亭子の柱ハ中より折れ。半相既ハ塌ぬ時。山門の門子の肝
 響をひつけり。怪し高きより見おろせし。彼魯智深ハ踏
 山より上り来りて二人の門子うち驚き山門を関し。門縫裏
 張り張ハ魯智深拳を揚り門を敲く。對を搦り下り。あけ
 あけと叫び。門子敢て開く事あり。その時魯智深ハ身を扭過
 ぐ。左邊に立は金剛をうり。声ありて喝するハ汝この鳥大漢子
 ねなかりし門を敲んとせ。却り拳を合著り。それを威す
 とも。こまかしく汝を拍まづ。いでてある酒をえまづ。といひもあ
 へ。臺基に跳り。杖刺すを名擲り。慈心を捨て。右に板撒
 折本頭を閃け。金剛の眼を下と打ハ泥和顔色まづ脱す。
 門子ハこの光景を張看り。大に慌す。長老ハ報知人して連化在
 了。いささか魯智深を又刃を調轉し。右邊なる金剛を喝
 著。汝大なる口をひき。さうを笑ふハ何事ぞか。きめえんを



ろ
ちん
魚智深
醉
金剛をせつ



罵つては。彼金剛の脚の上をカキ就く打つて一声地も震ふ價の
 響く。金剛を搗と顛墮臺基の下に倒れさせれば魯智深も
 一々もち笑ひ且罵且叫ひあは外面も停立ぬ。二人の門ふも
 魯智深が鳥体を長老に報してすまの長老の宣く汝も漫いさ
 づか。彼を怒する事あられ。そ退出ると命を折しも首を監
 寺の都寺さへ職ある僧人を。方丈にまゐりて稟す。彼野猫今
 日も又いそぐ酔く。半山の亭子上と山門の金剛をもち壊す。こ
 いふ。異口同音に報する長老の食く。いふ人より
 天子も。あは酔漢を避る。呪老僧の争ひ制まらざる。あは
 りや金剛をもち壊す。彼施主趙員外に請く新に塑せ亭子
 をも修復せんき。の汝達彼の前日の。あはをえざるや。宣へん

衆僧はんへあ。方丈を退き門子を呼び。彼をいふ。あはも。
 門を固き。命せらる。魯智深の志。停まら。ありは。あはも。
 とく。門を。大に焦燥この直娘の走驢も。これを寺
 内より下と。把まり。山門を忽地焼へ。いま。あはも。
 あはも。罵る僧衆これを。大に。あはも。門子を呼ぶ
 い。あはも。不良の行を。あはも。量か。あはも。
 門を。その光景を。あはも。門子を。あはも。
 お。門の栓を。あはも。魯智深と。あはも。
 僧衆も。あはも。遠く。あはも。魯智深と。あはも。
 響を。あはも。推。推。門扇を。あはも。
 撲地と。あはも。僧堂。あはも。選佛場の中。あはも。

打坐の禪和子もつちたに驚き、頭を低く居りしる。魯智深の禪床
 の邊に到りてやうく。喉嚨の裏略くと響つ。此首は首吐せし
 その臭氣いも堪ぐ。衆僧目を閃鼻を掩ひ共々吐へきと氣ふ。
 魯智深へ吐了る。繼を解もあくも直腹を咄く。引剥すうふ彼
 狗の腿懐の中よりまたひ着る。魯智深これをつんてやうくこち
 笑ひ。今吐盡し。少く幾うと独ごち拾ひ。うく喫は
 証。衆僧又うみ忍びむ。袖を臉におくあて。慢く地と腹へする
 を知深上首の僧を引く。め法も些むり喫多人とたつれ。一塊は
 狗の肉を唇へさし着き。上首の和尚腹を扭過袖り。口を林と
 塞命もけく契とす。あくも魯智深又下首の禪和子が甯邊ふ
 衝着く。うく責け。魯智深禪和子防り。禪床をたたく。

するところを魯智深と捉く。放さず。只顔肉を以てさし入は、
 を同宿の禪和子四五人走り去る。さあ。知深は陪結まね。魯智
 深肉を投擲く。衆僧等しき拳を提起。禪和子が光腦
 袋上を判く。剥く。鑿く。堂内の僧衆さうきく。右往左往
 み逃す。廊下を投く。躲んとするを逃さく。封出り。肘は
 都寺監寺等も長老も出り。一班ある執事の僧人を
 呼ぶ。老郎火工道人直廳。一書は直廳を。轎夫も約一二百人を
 驅催す。杖棒を引提。中を。盤頭。皆
 うちもみ打入り。せひあく智深を捉んとす。魯智深へこれを
 へく。大に吼。別み器械あくる。佛前ある卓脚兩條を搥
 拵く。一昧も跳ゆ。その光景心頭も火焰起。口角も霹靂鳴



正日正箭の中アツク。崖を打る虎豹のどく。恰も鎧を着く洞を跳
 は射狼ノ異あふも東を指くハ西を打南を指くハ北を打その
 勢燦然と〜。敢當は〜もあふざれば夫庭ヲ傷を被るの十
 餘人乃ひひさる魯智深ハあほ兎ハあふ〜。法堂のわたりヲ赶到
 上只ハ〜ハ長老立出多〜。智深並禮あせと僧衆も手を動
 べ〜す〜制〜ハ衆人ハ長老の出多〜を〜。おの〜退き隠れ
 一魯智深も卓脚を投す〜。長老も〜爲も做主〜人
 中せ〜この時酒ハ七八分醒み〜。長老ハ魯智深をち〜招
 き汝連み老僧を苦〜前も酔〜不善の行ハ〜を〜。
 趙員外了告知せ〜員外書簡〜。僧衆ハ陪話し
 け〜。就裏ハ〜おきめ〜を今又酔〜羊山の亭子〜を

打塌。且山門の金剛を打壞。加旗衆人を打擲。まの罪業ハ
 き〜あ〜つ〜この五臺山と文殊菩薩の道場〜。千百
 清淨のヨク比ヤ〜。い〜。穢汚〜を任〜。今
 了れ汝をさし遣知を安排せん。〜命〜。魯
 智深を方丈ノ伴ハ職事僧人を〜。打傷〜。伐養
 主〜。の百長老ハ首坐〜高議〜。趙員外ハ消息〜
 情由を告〜。員外ハ〜。亭子〜。金剛ハ〜。目連
 修復〜。魯智深〜。長老の發遣〜。清
 規ヲ從ハ〜。回書〜。の使〜。寄〜。し〜。長
 老ヤ〜。侍者の僧を呼〜。卓布の直裰一〜。僧鞋十兩の
 白銀を〜。魯智深を召〜。被件〜。を賜〜。汝兩度〜。

長老常
 人不成立
 四句偈
 設其通
 後林中
 達摩
 二龍山
 又...

君山を閉せし。仏法を落しめし。その罪軽し。またとて。施主趙
 負外の面皮を鷹ん。とを。これ一封の書簡を贈りし。汝が
 遣へし。奴を安排せり。且これ夜未。汝が始終の事を。看了し。身六
 四句の偈を説ふ。後戒す。汝を終ふ。受用よ
 と宣へ。魯智深。く。み。く。その慈悲を感激し。長老ねが
 く。その偈を。多。多。と。請り。む。嗚乎。この長老。透徹。ふ。く。く。金
 哀憐し。道高。權智。多。多。未。未。を。説。ふ。一。身。も。錯。誤。ふ。く。く。宣
 する。よ。彼。魯智深。禪杖を揮て。天下の英雄。高。傑。と。戦。を。決。し。怒
 く。戒。刀。を。割。り。ま。き。の。世。上。の。惡。徒。逆。臣。を。砍。ころ。し。名。の。塞。北。の。千。里。を
 揮。ひ。佛。果。の。江。南。等。一。列。を。得。ま。り。ち。は。

(一) 小霸王醉。銷金の帳。入。は。

この時長老魯智深。對。し。宣。ふ。中。智。深。が。汝。を。遣。ま。さ。き。知
 を指揮せん。多。多。一。人。の。師。才。あり。し。智。清。禪。師。の。号。し。是。し
 東京大相國寺。不。住。持。せり。これ今この書簡を寄せ。汝を托し
 遣。ま。す。又。夜。未。看。了。と。ころ。の。四。句。の。偈。の。汝。が。生。涯。の。大。事。か。ら。し。

等閑。ふ。ひ。し。ふ。れ。と。宣。へ。魯智深。跪。し。礼。拜。し。ね。が。く。の。の。偈
 を。分。ん。と。せ。し。長老。偈。言。を。説。か。し。宣。く。

遇。林。野。豬。而。起
 遇。山。峯。龍。而。富
 遇。水。龍。山。而。興
 遇。江。池。而。止

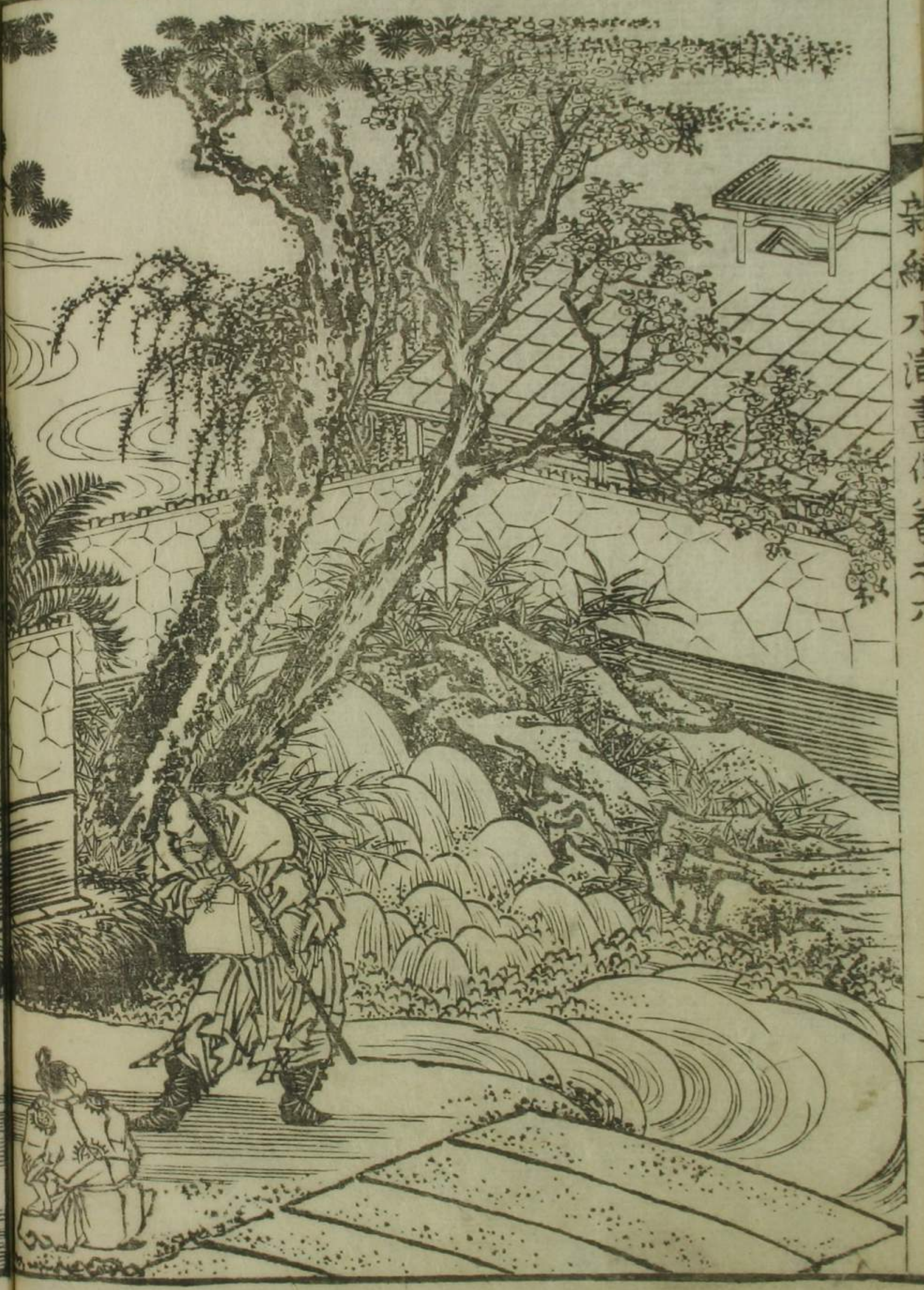
と。示。す。の。魯智深。聽。を。り。長老。を。拜。し。包。裏。を。沓。お。ひ。つ。腰
 包。肚。包。し。旅。を。る。の。常。し。布。り。し。肚。を。ま。き。巻。き。長老
 の。書。簡。を。受。と。り。衆。僧。人。と。辞。別。し。や。く。五。臺。山。を。出。離。し。行

疊々なる乱山の下に一つの莊院ありき。さうば彼處よりこの夜
 をあきざりて連忙しく走り着て来る。十人あやりの莊家
 東西に奔走しつゝかかづはけし魯智深怪しつゝ莊前
 へ。禪杖を倚りけり。彼莊家は對ひこゝへ行つしきる行僧
 あり。今宵一夜を借し歌しえうしつを莊家のゆもあき
 智深をええり。和尚をやく立去りて幸ふ死を脱しつゝ魯
 智深は眉を頻るも得ぬ宿しんとしつれ何の科
 あり。殺さんとしつをぞとてバ莊家うち腹うち。汝去ばや
 くゆ。胡説はあまありも足負縁とあま立地細著て
 空房は懸糸おへきぞといきまけハ魯智深忽地大いり。この鳥
 人更道理をまらむ。これあてハ汝ハ縛縛らる。東へんんや

とつを誅まの莊家も或ハ罵るのあり。或ハ勸るものなり魯智
 深は怒を發し。禪杖をあげ揚る。打かへきて光景なり。階
 下甲六旬もちろき老人もハ一條の拄杖を衝く。門外を走り
 や。莊客も。なげてかきまらきぞ。喝しむハ莊客も。まの
 和尚いひま。我們を打んとしつをまらり。せひあ。開淨なる
 ゆし。魯智深まら。彼老人ハ對ひ愚僧のハ五臺山の傳
 人なる。所用あり。東京へ赴く途中。今晚宿頭をとりおらまら
 一宿せむを乞ふ。彼徒を働き。理不直ハ縛縛人といき
 ませぬ。己を得意かくの。老人ハ。既よとま五
 臺山より来るハ師父なり。これハ從ひ。裡は。正
 堂は。寶主の。後老人の。師父。



桃花村
魚智深
宿を
借る



宗綱ノ清書傳卷之六

そ。莊客も活仏の自大山より来多ひ一師父あまを志んば。葷菜一箇
 の行僧しこも進んやつら。愚老従来と室と室は法僧。一帰依するも。か
 ちろふ今夜。莊上車あるをり。宿一進ん。さうし。か。持も
 二やうせまといつ。魯智深禪杖を衝し身を起し。宜は好意辱く
 こそ。ま。師の名字の何と名告う。師曰く。老客答く。愚老が姓劉氏
 あり。この処を桃花村と名つら。ま。御人申へ。愚老をひて。桃花
 莊の劉太公と稱し。又師父の俗性法名の何と名告う。ま。魯智深
 がいつ。ま。師。智真長老諱の二さ。賜り。又。ま。俗性。魚目氏。ある。故
 は魯智深と呼れ。ま。時。劉太公のま。世の晩飯を進ん。ま。小
 葷りの腥りのま。喫。ま。ま。魯智深もあま。これ。すて
 肉をも酒をも厭む。牛肉狗肉。あま。ま。せ。喫。ま。劉太公。

うや。うち笑ひ。莊客を。酒食を。わ。せ。命。不。具。有
 庄客ハ卓子の上ハ牛肉と之四様の菜蔬をり。つ。提。出。ぬ
 魯智深これを見。肚包腰包を解ゆ。筋をあ。ま。ち。ら。間
 小。庄客ハ又一壺の酒を將。ま。魯智深ハ且喫。且。庄客
 酒を。又。飯。を。り。あ。ま。劉太公ハ對。これを見
 つ。早。果。從。顏。を。合。せ。ま。晩。飯。を。り。劉太公
 ハ魚目智深ハ對。師父ハ外面。耳房。中。不。歇。夜。間。熱。開
 一。ま。あ。ま。出。ま。魯智深。これを見
 命。け。ま。今夜。何。の。ま。同。劉太公。詳。も。告。出。家。れ
 間。ま。あ。ま。魯智深。怪。ま。劉太公
 を。顔。の。ま。快。ま。思。僧。が。宿。し。を。厭。ま。明。日

一命せき前後は許多の燈燭を点すも打麥場のやうりよ一條
 の卓子をうきすえこれゆも香花燈燭を建つてねく山海の味准
 備ははせき装あはきり。既ふ初更もるるころ山のほりりは鐘鳴
 鼓響しふ。劉太公はこれ彼人の出まあるんとおりあふ。魯智深が
 りいりておりあはき。莊客おもてよ汗を握りて。莊の門外よりあて
 彼首をうち望する折しは。只えれは遙は四五十の火把照曜く白
 日のごとくなるゆ。一族の人馬劉太公が莊上を投り走せまされは太
 公下知しき大は莊門をわたりせ。さきさき出迎れへ走來ぬ。評定の
 人数前は遮り後擁明晃くきりり。そのはさくこれ番械なり其
 旗鎗のたぐひも紅線の絹布を縛著。小嘯囉おが頭中へ野荒
 を挿頭と。前へ紅紗の燈籠四五對をりり。路を照らし。付太

王馬の上
 一杖の羅帛
 腰の銷金の紅
 馬を騎り
 声を齋
 跪く
 大王の治下
 二盃をす
 笑ひ
 匹配

王馬上花巾の打物。頭も撮尖乾紅四面巾を戴き。髻の傍小
 一杖の羅帛せ。像生花を挿し。又も金繡の緑羅袍を穿て。
 腰の銷金の紅膝疋を繫ひ。一雙の牛皮靴を著く。高頭一正の白
 馬を騎り。この大王莊前へ到り。馬より下り。小嘯囉
 声を齋。賀を舒。劉太公慌忙。出迎へ衆の莊客をへ
 跪く。左右より大王をみ入り。劉太公を扶起し。汝は是の文
 人か。おめ。か。嚴ひ。劉太公は。拜伏し。それ
 大王の治下なる人なり。い。些の礼儀をも竭さ。へ。些の
 二盃をす。めん。て。管待尋常。了。れ。大王既。て。八分の醉。出。見
 う。笑ひ。れ。汝が女婿。なる。も。些の虧を負。汝が女見
 匹配。なる。大なる僥倖。あり。この財。盃のか。ても。

行簡之并書傳卷之二

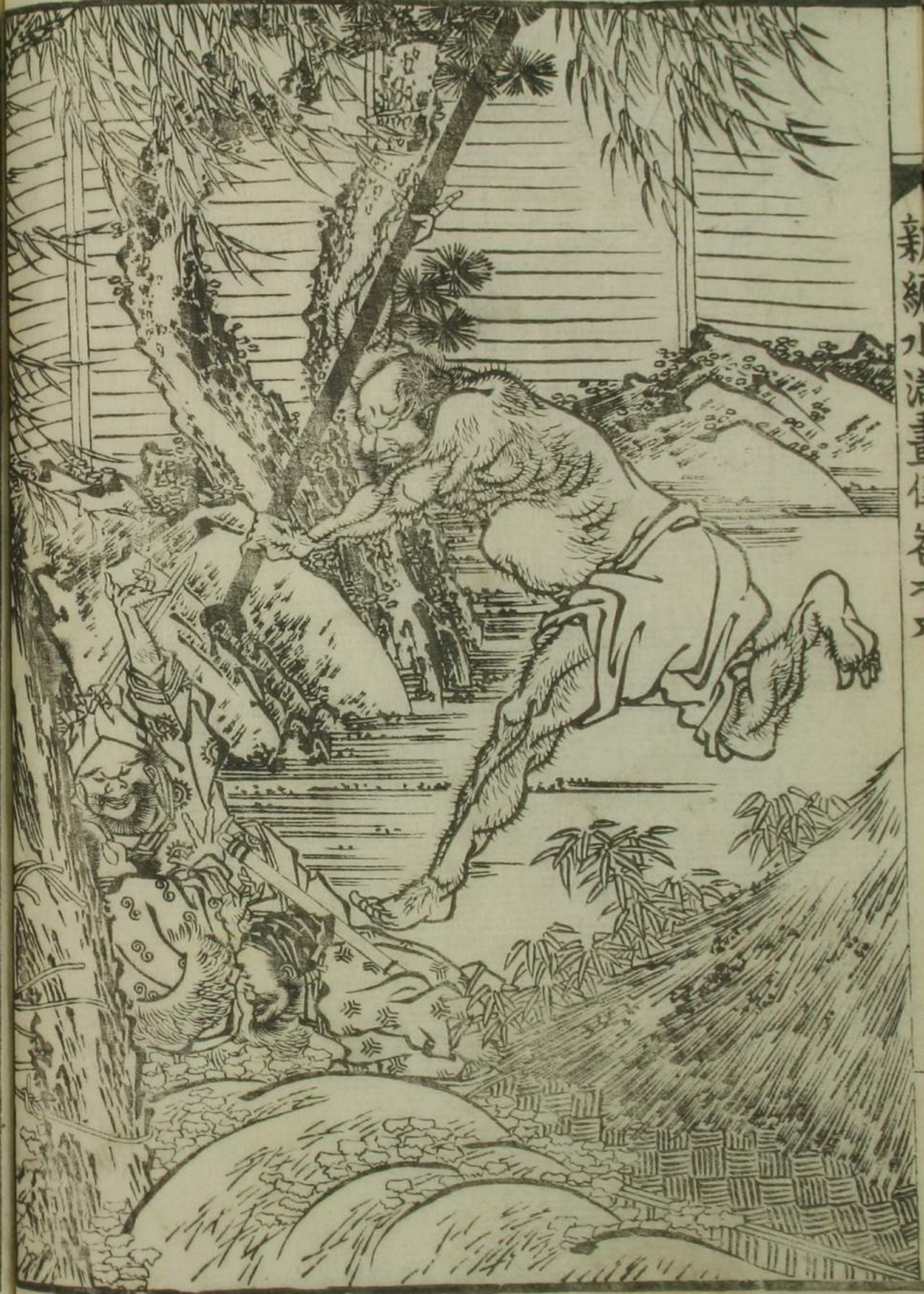


山を下りて
小霸王
桃花の庄
入贅す





新人の居は
魚智溪
小霸王を懲り



小朝王
あつて
連北て
敵馬
わらう
鞭つ

小頼子も碎ふぞうりよ丁と撲ハ大王なる苦き。かぎて老公を打ど
 としせもあへず。魯智深ふらび罵り。ぞで老婆の正體を濡ら
 せんぞといきすたつ。床のやうり。拖倒し。乱打よろやふ。大王すんく
 苦痛も堪む。只人ごろしと叫びきり。劉太公の這早因縁を説き
 彼大王を勧む。とひひし。房の裏さる。人ごろしと叫声
 する。敬馬も慌忙し。燈燭を著し。小喽囉おももよ走りまき
 入る。彼胖和尚ハ赤袴ふなり。大王を騎翻中。打も殺さる。赤
 氣もあれハ小喽囉。大王も人衆皆まき。大王を救へ。叫れハ
 夥の小喽囉鎗を拖棒を曳房の裏に走まれ。魯智深ハ大王を
 あけ撒し。禪杖を綽まる。一声嘯し。跳せり。されど小喽囉ホハの
 心極に害怕。危者あり。つらむ。劉太公ハ只顧心。さる。

慌忙し。せんまを走らざりし。大王ハ打開まき。房の門を脱れ
 出莊門のやうり。走あき。彼緑楊ハ繫あきし。馬ハ閃り。さる。跨
 一杖の柳を多折。これを鞭し。跑せり。馬ハ只ぞら。処を
 繞居し。敢て走りまき。されハ大王ハ焦燥。この畜生。あはれ。是
 を欺し。罵らる。ふらび。えん。い。ま。走。ら。る。も。さ。ら。り。な。り。を
 慌し。ま。ま。韁繩も解。さ。り。つ。ま。あ。が。ん。鈍。す。連。忙。し。これ。を
 扯断。柳の鞭。め。打。し。挑。花。山。を。望。み。脱。去。り。この。耐。小。喽。囉
 あり。ま。四。落。ハ。落。し。坐。せ。し。劉。太。公。ハ。魯。智。深。を。拖。住。し。い。と。く
 う。と。和。尚。も。あ。き。つ。ま。を。し。こ。が。一。衣。を。著。し。あ。り。の。う。あ。と。い。し
 魯。智。深。も。笑。つ。ま。公。を。怪。し。ま。り。そ。す。ん。つ。ま。衣。服。と。直。裵
 を。把。来。ま。を。被。を。り。ま。お。ご。り。せん。と。い。ハ。劉。太。公。ハ。房。み。ゆ。き。

魯智深が衣服を將まら。これ當初只因縁を説く彼を勸め心を回
意を轉させしむとのことひし。却て大王を打擲するひし。正と

山より大隊を驅催し。一隊を殺し盡すべし。これ何とせん

と。直裰を舊のまき穿て容を正し。公

老神經界相公。懐前の提轄官

を打殺す。かく出家せり。維の鳥

を来し。敢てのうらむ。疑

禪杖を引提し。又人といふ。莊客も立ちて。これを奴と

動も。魯智深これを使ふ。燈草を掲げ。下り

劉太公。顧敬馬。嘆し。いとあり。心い。師父。運

あり。家の守護神もあり。と。懇懇と托し。魯

智深。これ渠奴を殺し。竭す。死す。も。を

劉太公。力を。莊客を。此の酒を將来し。師

父母。進し。これ。多し。酒を。過あり。ん

酒を。十分。氣力。酔も。何。苦。き。間

酒肉を將来し。魯智深。これ。自。居

畢竟。大王。たび。殺。否。次の。を

讀得。と。ん。

新編水滸畫傳卷之六 畢

